

## 定家様を用いた書記者の書記規範意識

### The Connections between Calligraphy Rules and Writing Systems, Which are Used by Writers Who Write with Teikayou

家 入 博 徳

HEIRI hironori

はじめに

藤原定家の書風は、同時代の人々とは極端に異なり特徴あるものとして知られ、今日「定家様」と呼ばれる。そして、定家以降その書風は受け継がれていく。定家の書風を真似たものは多く知られ、「定家流」といった書流をも形成する。

このような、いわゆる定家様を用いた人々は、書風のみを真似たのであろうか。定家は定家様と呼ばれる独特の形をした文字で書いたことで知られるが、同時に、仮名遣いに代表されるように、『下官集』において書記に関するいくつかの規範を設け、以後それを基に書記していることが明らかとなっている。では、その書記規範を、定家様を用いた人々はそのように捉えていたのであろうか。ま

た、漢字や異体仮名といった使用文字の選択には仮名遣いのような規則性はなかったのだろうか。

定家以降の書記のあり方を考える場合、定家様を用いた人々が、定家の書記および設定した書記規範をどこまで意識していたのかの事態を明らかにすることは、書記の通時的な継承性を考える上で重要である。

そこで、本稿では定家様で書かれており、さらに自筆が確認されている二条為藤と一条法印定為の仮名自筆資料（どちらも『嘉元百首』を取り上げ書記の実態を分析し、書風と書記規範の関係およびその継承性について考察することにする）。

定家以降、定家様で書記した人物としては為藤・定為ともに最古であり、さらに、定家からそれほど時を経ない鎌倉末期から南北朝期にかけての人物であることから、定家が示した書記規範の継

承の実態を解明するとともに、当時における書記の一端を解明できるものと考ええる。なお、定家の書記資料として、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』<sup>〔註3〕</sup>を使用する。

### 一 考察資料について

今日、定家の書風は定家様と呼称される独特な字形である。定家の嫡子である藤原為家は定家とは異なつた書風であるが、定家以降、定家様で書記している人々は少なくない<sup>〔註4〕</sup>。中でも、管見する限り、自筆が確認できる定家様の初出としては二条為藤・一条法印定為である。

為藤は建治元年(一二七五)生、正中元年(一二三四)没。二条為世の二男。二男であつたが、兄である二条為道が正安元年(一二九九)に没したため、二条家の嫡子となつた。『冷泉家時雨亭叢書』第三十四巻の解題<sup>〔註5〕</sup>によると、為藤の『嘉元百首』詠進は乾元元年(一一三〇二)と推定されている。そうすると、本稿考察対象資料は二十七歳時点での書記である。

定為は二条為氏の子。為藤の父である為世の弟にあたる。生没年は不明。ただし、井上宗雄氏によると、建長四年(一二五二)頃が生年と推定されている。定為の成年を井上氏の説に従い、為藤同様『嘉元百首』詠進を乾元元年とすると、本稿考察対象資料は五十歳時点での書記となる。

定家は応保二年(一一六二)生、仁治二年(一二四一)没。藤原俊成二男。本稿考察対象資料である『拾遺愚草』は定家の自撰家集。自筆本が冷泉家時雨亭文庫に所蔵されている<sup>〔註6〕</sup>。

本稿考察対象である三人の資料(為藤・定為『嘉元百首』、定家『拾遺愚草』)に共通していることとして、すべて書記者自身が和歌を考え書記していったものであるということである。つまり、書記者自身の言語使用や表記使用を反映している可能性が高い資料である。何かしらの親本をもとに書写した資料とは異なり、書記者独自の表記状況が把握できるものと思われる。

### 二 行に対する意識

書記する際の「行」については、三資料とも一首二行書。上句を一行目、下句を二行目に書記している【図1-3】。これは、定家が『下官集』「書歌事」で、

知<sup>二</sup>物様<sup>一</sup>之人、称<sup>二</sup>故実<sup>一</sup>態以<sup>二</sup>上句之末<sup>一</sup>  
 下句之行之上に書。

さくらちるこのしたかせは さむか  
 らてそらにしられぬゆきそふりける

如此書、雖有<sup>二</sup>其説<sup>一</sup>当时至<sup>二</sup>愚之性<sup>一</sup>迷。

而不<sup>レ</sup>弁<sup>二</sup>上下句<sup>一</sup>。只付<sup>二</sup>読安<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>左説<sup>一</sup>。

さくらちるこのした風はさむからて

そらにしられぬゆきそふりける

真名を書交字或ハ落字之時。

上句一行にたらずなれとも只如<sup>二</sup>闕字<sup>一</sup>。

其所を置て次の行に可<sup>レ</sup>書<sup>二</sup>下句<sup>一</sup>之由<sup>レ</sup>洪<sup>レ</sup>之。

と述べた書記規範と一致している。定家以前では「故実」と称し、一行目に上句の途中までを書き、二行目に上句の残り<sup>〔註7〕</sup>と下句を書い

ていたのに対し、定家は上句を一行目、下句を二行目に書くことを書記規範の一つとして定めたのである。

定家が定めたこの行に対する考え方は、定家以降では主流となっている。為藤・定為と同時代の書記者自筆の資料として、『文保百首』（二十一人）、『永徳百首』（十二人）、『嘉元百首』（二人）が冷泉家時雨亭文庫に現存するが、その書記形式は、すべて定家が『下官集』『書歌事』で設定した書記規範と一致するのである。『文保百首』、『永徳百首』、『嘉元百首』の各資料は勅撰集編纂のために、勅撰集撰者が当時の貴族に提出を求めた応制百首である。したがって、当時（一二三〇年前後）において、貴族が和歌を書記する際の基本的な書記形式とすることができると言える。さらに、その他にも、例えば冷泉家時雨亭文庫蔵藤原為家筆『続後撰和歌集』や陽明文庫蔵冷泉為相筆『古今和歌集』といった書写者が明らかに勅撰集においても、一首二行書きであり、上句を一行目、下句を二行目に書写しており、二行書きの和歌の書写は、定家以降では定家の定めた書記規範に収斂していると言える。

### 三 仮名遣いの実態

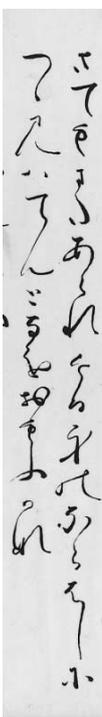
定家以降の仮名遣いの変遷については、これまで山田孝雄『仮名遣の歴史』（宝文館出版 昭和四年）、木枝増一『仮名遣研究史』（贅精社 昭和八年）の著書や迫野虔徳『定家以後の仮名遣』（『今井源衛教授退官記念文学論叢』 昭和五十七年）等によって考察されてきた。しかし、各々の時代における仮名遣いの実態については、いまだ明らかになっていないことが多い。したがって、本節で

は自筆資料による仮名遣いの実態、中でも「お」について分析していくことにする。

これまでの先達の考察でも明らかのように、定家は『下官集』を著して以降、自身の定めた仮名遣いに従った書記をしている。冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』を調査したところ、自身の仮名遣いを順守していた。なお、定家は自身の周囲の人々には仮名遣いを強制・強要していないことが知られている。しかし、定家のカノン化に伴い、仮名遣いが強調されていることが定家以降に著された歌論書からうかがえる。

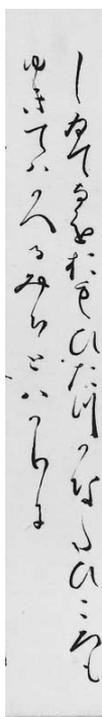
為藤・定為の仮名遣いの実態であるが、「お」について調査したところ、定家の仮名遣いを順守した書記をしていたことが分かった【表Ⅰ】。さらに、為藤の場合、よく見ると厳格に順守しようとしていることが分かる。以下に例を二首示すことにする。

○（『冷泉家時雨亭叢書』第三十四巻 66頁）



さても万多あられ介る【身】能なら者し尔  
つゝ見ハてんとなをおもふ可那

○（『冷泉家時雨亭叢書』第三十四巻 70頁）



しゐてなをおもひたつ可な多ひころも  
ゆきてハ可へるみちとハ可り尔

両歌の傍線部は「お」が連続している箇所であり、どちらも、「なを(猶)十「おもふ(思)である。「なを」の「を」は定家の仮名遣いでは「を」であり、「おもふ」の「お」は定家の仮名遣いでは「お」であり、いずれも『下官集』に従っている。さらに、これは『下官集』「嫌文字事」で、

緒之音 をちりぬるを書し之仍欲用之。

をみなへし をとは山 をくら山

たまのを をさゝ をたえのは

をくつゆ てにをはの詞のをの字

尾之音 お うゐの奥山書し之故也。

おく山 おほかた おもふ おしむ

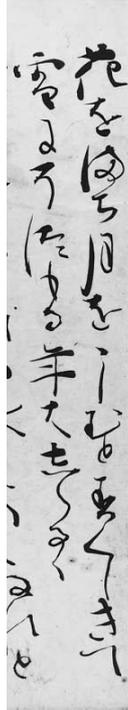
おとろく おきのは おのへのまつ

花をおる 時おりふし

と仮名遣いの書記規範を設定した中の「花をおる」と同様に、「お」の連続した箇所において書き分けていることが分かる。<sup>(注1)</sup>

一方、定家自身はそこまで厳格には書き分けていなかった可能性がある。冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』上九丁表を見てみる。

○(『冷泉家時雨亭叢書』第八卷 25頁)



【花】を満ち【月】を、しむと春くしきて  
【雪】尔そ徒もる【年】者志らるゝ

「月を」十「しむ(惜)」であるが、「月を」の「を」は助詞であり、定家の仮名遣いでは「を」であるが、疊字で書記されている「しむ」は定家の仮名遣いでは「お」とする箇所である。疊字は同じ漢字や仮名を繰り返す時に使用する記号であり、文雄の『和字大観抄』に「同字を重ねたるを疊字と云」とあることから、疊字で示した箇所は「を」と読み取ることになり、上述の例では定家の仮名遣いとは異なっていると言える。このような例が冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』上二丁表より上十四丁表の百首まででも4例見られる。定家以降、定家のカノン化に伴い仮名遣いが強調され厳格化されていった。十四世紀後半成立の行阿『仮名文字遣』(『語学叢書』東洋社 明治三十四年)冒頭では、

京極中納言定家卿家集拾遺愚草の清書を祖父河内前司于時大飲助親行に誂申されける時、親行申て云、を・お・え・ゑ・へ・い・ゐ・ひ等の文字の聲かよひたる誤あるによりて、其字の見わきがたき事在此、然間、此次をもて、後學のためにさためをかるべき由、黄門に申處に、われも志か日來思より之事也、さらば主襲が所存の分、書出して進ずべき由、仰られける間、大概如此注進之處、申どころ悉真理相叶へりとして、則合點せられ畢。

然者文字遣を定むる事、親行が抄出是濫觴也。加之、行阿思案之するに、権者の製作として真名の極草の字を伊呂波に縮なして、文字のかすのすくなきに、い・井・ひ・於・江・ゑ・へ同読のあるにて志りぬ、各別の要用につかふべきいはれを。然而、先達の猶書漏されたる事ともある間、是非の迷をひらかんがために、追て勘かみるのみにあらず、更に又ほ・わ・

は・む・う・ふの字等を、新しく志るしそへ畢。其故ハ、ほハをによまれ、わハはにかよふ。むハうにまぎる。残るところの詞等ありといへども、是にて准據すべき歟。仍子孫等守此之趣可神秘々々

と記されており、定家以降、定家の仮名遣いが強調・厳格化されていったことがうかがえる。しかし、それが定家自身の書記に当てはまるか否かは別問題である。定家が自身で定めた仮名遣いをどこまで厳格に実践していたのかについては、現在調査中であるが、理想（『下官集』で示した書記規範）と現実（書記の実態）が異なることも十分考えられる。

#### 四 使用文字のデータ分析から

##### ア 漢字

各資料における漢字使用の実態を見てみることにする。

【表Ⅱ】は漢字と仮名の使用割合および漢字の使用種類数を示したものである。漢字の使用数および使用種類数は三資料それぞれ異なっていた。三資料を見る限り、画数が少なく頻出度が高い言葉は漢字を使用するといった共通性はみられるものの、その他の漢字使用に規則性は見られない。さらに、為藤・定為は同じ時期に提出した応制百首にも関わらず、使用した漢字の数および種類はおよそ三倍の違いが見られる。漢字の使用に関しては、各自の判断に委ねられていたと想定される。

##### イ 仮名の異体字

異体仮名の使用については、【表Ⅲ】にその一覧を挙げた。<sup>(注2)</sup>さらに、その中でも、一音節に対し三種類以上の異体仮名の使用が見られるものをいくつか取り上げ、棒グラフで示した【図Ⅳ】。

以下、定家の使用実態を基準として為藤・定為の異体仮名使用状況を分析する。

「か」 定家は「可」の使用がもつとも多く、その他に「か」を使用している。為藤はほぼ「可」のみを使用し、その他に「か」を使用している。使用割合は多少異なるものの、その傾向は両者同様のものと考えられる。一方、定為は「可」と「か」をほぼ同割合で使用し、さらによく見ると「か」の使用割合が高く、上述二資料とは異なる傾向を示している。

##### 「け」

定家は「介」の使用がもつとも多く、その他に「遣」や「け」を使用している。為藤も「介」の使用がもつとも多く、その他に「遣」や「け」を使用している。定家に比べ為藤は「遣」の使用割合が高いが、使用割合の傾向は同様のものと考えられる。一方、定為は「遣」の使用がもつとも多く、その他に「け」「氣」「介」を使用している。定家・定為がもつとも使用していた「介」を定為はほぼ使用していない。

##### 「す」

定家は「春」と「す」をほぼ同割合で使用している。その他に「須」を使用している。為藤は「春」の使用がもつとも多く、その他に「す」「須」を使用している。定家に比べ「す」の使用割合が少なく、「須」が高い。定為は「す」の使用がもつとも多く、「春」「須」はあまり使

用していない。

〔に〕 定家は「尔」の使用がもっとも多く、その他に「に」を使用している。為藤も定家同様「尔」の使用がもっとも多量のもの、その他に「に」「耳」の使用が見られ、さらに、その使用割合も定家とは若干異なっている。定家は「に」の使用がもっとも多く、その他に「尔」「耳」を使用している。

〔は〕 定家は「者」の使用がもっとも多く、その他に「ハ」「は」を使用している。為藤は「ハ」「者」を同割合で使用し、その他に「は」「葉」を使用している。定家は「者」の使用がもっとも多く、その他に「は」「ハ」「葉」「盤」を使用している。「は」に関しては、三資料の使用割合において何かしらの共通性は見られない。さらに詳細な使用実態については後述する。

〔る〕 定家は「る」の使用がもっとも多く、その他に「累」を使用している。為藤も定家と同様の使用種類および割合である。一方、定家は「る」と「累」を同割合で使用し、その他に「流」を使用している。

分析から、定家と為藤の異体仮名の使用割合は近似おり、定家は独自の使用の実態が確認できた。

ウ 「は」字の使用実態

〔は〕字については、伊坂淳一氏が述べられるように、<sup>(注13)</sup> 今日まで用法上研究・指摘されることが多かった。使用頻度が高く、さらに、助詞をはじめとした機能的な使用法が見いだされる可能性が高いか

らである。したがって、本稿においても考察する意義は少なからずあると考える。

【表Ⅳ】は定家・為藤・各異体仮名における品詞別使用実態<sup>(注14)</sup>である。

<sup>(注15)</sup> 伊坂氏によると、俊成の『広田社歌合』の場合、「ハ」はほぼ助詞専用であり、「者」は助詞にはほとんど使用されていないといった使い分けの状況が見られるという。三資料を見渡すと、定家は助詞を含め様々な品詞の語に「者」を使用しているものの、「ハ」を助詞にしか使用していないことから、俊成同様、異体仮名がある種使い分けていた可能性はある。しかし、為藤・定家にはそのようなはっきりとした使い分けが見られない。したがって、現段階では三資料共通の異体仮名の機能的用法は見られないと言える。

しかし、それぞれの資料を個々に見ていくと、機能的用法と考えられる箇所もある。「夜」「は」について見てみる。

定家は「夜」に続く「は」には『拾遺愚草』では、すべて「者」を使用している。この場合、名詞「夜半」と名詞「夜」十係助詞「は」があげられるが、いずれも「者」である。この箇所については、『拾遺愚草』のすべての該当箇所を調査したが、いずれも「者」を使用している。

(上二十五丁表裏)

あ遣ぬとも【猶】おもか介尔堂つ多【山】

こ飛し可るへき【夜】者のそら【哉】 ↑「夜半」

(上六十三丁表)

【春】の【夜】者【月】の【桂】も尔本ふらん

飛可り尔【梅】の【色】者方可ひぬ ↑「夜」十「は」

次に為藤だが、為藤は「夜」に続く「は」にはすべて「ハ」を使用している。定家は同箇所「者」を使用していたが、それを為藤は「ハ」を使用しているのである。

(二十八番歌)

ねをしのふ【夜】ハの本多る能おも日こそ  
↑「夜半」  
くるしきも能ともえわ多里介れ

(四十五番歌)

【秋】の【夜】ハしのふのうらにこく【舟】も ↑「夜」十「は」  
あとあら者れて春める【月】可け

最後に定為だが、名詞「夜半」の場合は、「半」の箇所を「半」を使用し、「夜は」(名詞十係助詞)の場合は「ハ」を使用している。つまり、用途によって書き分けているのである。

(六十七番歌)

よし佐羅者あふと那【見】えそ【夜】【半】能【夢】 ↑「夜半」  
ちかへて堂にもう徒、堂能万む

(十七番歌)

者累の【夜】ハ【字】【治】能【橋】ひめ堂れ万徒と ↑「夜」十「は」  
かすむ堂もと能【月】を【見】るらむ

以上のことから考えると、現段階では通時的な継承性や共時的な使用法は見られないものの、各々独自に使用法を設定し、書記していたことが考えられる。

#### おわりに

本稿では、定家様を用いた人々の資料から、書記規範の継承性と

定家の文字使用との共通性について考察を試みた。

定家以降、仮名遣いの実態については、定家の著した『下官集』を厳守する傾向であることが分かった。つまり、定家以降の人々が歌論書で繰り返し述べるように、書記においても実践していたのである。

また、文字使用について、漢字においてはその共通性を見いだせなかったが、異体仮名において、為藤が定家の文字使用に比較的近似した傾向があることが分かった。定家自筆の諸本の多くは、為家以降冷泉家に相伝されたが、為藤は二条家嫡流であったことから、少ないながらも定家の自筆資料を見る機会が多く、その影響が考えられる。

なお、用字法説明の一環として、「は」字の使用実態の分析を試みたが、通時的な継承性や共時的な使用法は見られなかった。しかし、独自に用字の使用法を設定していることが考えられた。今後、他の文字の使用法の実態を含め、用字法の説明に向け広範囲に考察を行っていきたい。

(注1) 「定家様」については、五島美術館展覧会図録『定家様』(昭和六十二年)に詳しい。

(注2) 「定家流」については、『本朝古今名公古筆諸流』や『筆跡流儀系図』等といった書流系図によって確認できる。また、小松茂美著『日本書流全史』(講談社 昭和四十五年)や拙著『中世書写論』(勉誠出版 平成二十二年)でも考察している。

(注3) 本稿は、「書く」という行為における用語に「書記」と「書写」を使用している。矢田勉氏は、書記資料を扱う場合、「書記者自身が文

章を練りながら同時に記していった資料(二次的書記資料)」と「書記者自身の草稿を浄書する場合なども含めて、底本を写していった資料(二次的書記資料)」との違いを考慮する必要があると述べる(『仮名書記史研究の方法論について』『文化学年報』第二十四号 平成十七年)。この考えに首肯しつつも、矢田氏の言う「二次的書記資料」には、さらに細分化する必要があると考える。つまり、「書記者自身の草稿を浄書」とは、浄書であるにせよ草稿を考えたのは書記者自身であることから、書記者の言語使用を反映している可能性が高く、矢田氏の言う「一次的書記資料」に近い。一方、他者作成の底本を写した場合は他者の言語使用(底本の言語使用)の影響を受ける可能性が高い。したがって、本稿では書記者自身の草稿もしくはそれを底本とした資料を書く場合には「書記」を用い、他者作成の底本を書く場合には「書写」を用いる。

(注4) 『嘉元百首』は応制百首である。応制百首は自筆による提出が常であったことから、為藤・定為の資料を自筆として考える。なお、小松茂美は定為の筆跡は今日確認されていない(『古筆学大成』第十一卷)と繰り返し述べているが、定為本「袖中抄」(冷泉家時雨亭文庫・国立歴史民俗博物館所蔵)の本文・紙背文書との比較から考えて、自筆としてよいものと考ええる。

なお、考察対象を為藤筆『嘉元百首』(冷泉家時雨亭文庫蔵)、定為筆『嘉元百首』(静嘉堂文庫蔵)の和歌百首のみとした。

(注5) 為藤・定為の考察対象が和歌百首分とすることから、定家における考察対象を『拾遺愚草』の和歌一番歌(百番歌(上二丁表)上十四丁表)のみとした。

(注6) 注2と同。さらに、近年冷泉家時雨亭文庫から定家様で書写された

私家集の一群が発見されている(『冷泉家時雨亭叢書 擬定家本私家集』)。

(注7) 朝日新聞社 平成八年

(注8) 『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院 平成十九年

(注9) 『冷泉家時雨亭叢書』第八卷、第九卷 朝日新聞社 平成五年

(注10) 翻字における「一」は、その中の文字が漢字であることを示す。以下の翻字においても同じとする。

(注11) 定為の資料には、「お」字を連続して使用する箇所がなかったため、定為がどのくらい仮名遣いを厳守しようとしていたのかは現在のところ不明である。

(注12) 【表Ⅲ】は、使用割合をパーセントで示し、使用数をカッコ内に示している。

(注13) 伊坂淳一氏「藤原俊成の用字法・試論」『学苑』第五七七号 昭和六十三年

(注14) 助詞の項であるが、本論では係助詞・終助詞、接続助詞、副助詞と分類した。なお、副助詞は「ばかり」の語頭「ば」のことである。

(注15) 注13と同。

#### 【付記】

本稿への写真掲載につきましては、財団法人冷泉家時雨亭文庫、静嘉堂文庫よりご許可をいただきました。記して御礼申し上げます。

なお、本稿は平成二十四年度日本学術振興会科学研究費(若手(B))「未調査仮名自筆資料の分析による文字・表記意識の通時的研究」(課題番号:23720232)の研究成果である。

表Ⅰ 仮名遣いの実態

| 為藤          |    | 定家        |    | 定為          |    |
|-------------|----|-----------|----|-------------|----|
| 【お】         | 33 | 【お】       | 22 | 【お】         | 14 |
| おもふ (思ふ)    | 19 | おし (惜し)   | 8  | おのへ (尾上)    | 3  |
| おどろく (驚く)   | 3  | おもふ (思ふ)  | 5  | おもふ (思ふ)    | 3  |
| おなじ (同じ)    | 3  | おなじ (同じ)  | 3  | おし (惜し)     | 1  |
| おし (惜し)     | 2  | おる (折る)   | 2  | おき (沖)      | 1  |
| おき (沖)      | 1  | おもかげ (面影) | 1  | おつ (落つ)     | 1  |
| おりたつ (下り立つ) | 1  | おく (起く)   | 1  | おりはへ (織り延へ) | 1  |
| おも (面)      | 1  | おほはら (大原) | 1  | おぎ (荻)      | 1  |
| おぎ (荻)      | 1  | おぎ (荻)    | 1  | おも (面)      | 1  |
| おく (起く)     | 1  |           |    | お (尾)       | 1  |
| おのへ (尾上)    | 1  |           |    | おとこ (男)     | 1  |

|              |    |              |    |             |    |
|--------------|----|--------------|----|-------------|----|
| 【を】          | 56 | 【を】          | 65 | 【を】         | 50 |
| 助詞           | 33 | 助詞           | 41 | 助詞          | 32 |
| なを (猶)       | 6  | をく (置く)      | 10 | をく (置く)     | 6  |
| をとづれる (訪れる)  | 3  | をと (音)       | 4  | をの (己)      | 3  |
| をの (己)       | 2  | あを (青)       | 2  | おのれ (己)     | 1  |
| をのづから (自ら)   | 2  | をしなべて        | 2  | をちかた (遠方)   | 1  |
| とをし (遠し)     | 2  | をし (鴛鴦)      | 1  | あを (青)      | 1  |
| をやまだ (小山田)   | 1  | とをざかる (遠ざかる) | 1  | を (緒)       | 1  |
| をちかた (遠方)    | 1  | をみなへし (女郎花)  | 1  | をち (遠)      | 1  |
| さを姫          | 1  | をじか (牡鹿)     | 1  | をと (音)      | 1  |
| さを鹿          | 1  | をしへ (教へ)     | 1  | をぐらやま (小倉山) | 1  |
| あを (青)       | 1  | とを、 (撓)      | 1  | をか (岡)      | 1  |
| をちかへる (復ち返る) | 1  |              |    | をのづから (自ら)  | 1  |
| をと (音)       | 1  |              |    |             |    |
| をしね (小稲)     | 1  |              |    |             |    |

表Ⅱ 漢字の使用実態

|                    | 為藤    | 定家    | 定為     |
|--------------------|-------|-------|--------|
| 種類数                | 47    | 65    | 106    |
| 文字数                | 123   | 226   | 329    |
| 使用割合<br>漢字÷(漢字+仮名) | 4.13% | 7.97% | 11.76% |

表Ⅲ 異体仮名使用一覧

|   |   | 為藤          | 定家         | 定為         |   |   | 為藤         | 定家         | 定為         |   |   | 為藤         | 定家         | 定為         |
|---|---|-------------|------------|------------|---|---|------------|------------|------------|---|---|------------|------------|------------|
| と | と | 100.00(115) | 100.00(88) | 77.46(55)  | さ | さ | 53.03(35)  | 62.16(46)  | 24.53(13)  | あ | あ | 86.54(45)  | 100.00(32) | 86.00(43)  |
|   | 登 | 0.00(0)     | 0.00(0)    | 22.54(16)  |   | 佐 | 46.97(31)  | 37.84(28)  | 75.47(40)  |   | 阿 | 13.46(7)   | 0.00(0)    | 14.00(7)   |
| な | な | 67.50(81)   | 91.67(99)  | 64.94(50)  | し | し | 87.00(87)  | 76.11(86)  | 70.93(61)  | い | い | 100.00(43) | 87.10(27)  | 92.86(39)  |
|   | 那 | 32.50(39)   | 8.33(9)    | 35.06(27)  |   | 志 | 13.00(13)  | 23.89(27)  | 29.07(25)  |   | 伊 | 0.00(0)    | 12.90(4)   | 7.14(3)    |
| に | に | 25.00(25)   | 9.65(11)   | 56.98(49)  | す | す | 30.16(19)  | 44.19(19)  | 86.89(53)  | う | う | 100.00(27) | 100.00(26) | 100.00(27) |
|   | 耳 | 2.00(2)     | 0.00(0)    | 10.47(9)   |   | 春 | 55.56(35)  | 51.16(22)  | 9.84(6)    |   | え | 100.00(15) | 100.00(13) | 100.00(17) |
| ぬ | ぬ | 73.00(73)   | 90.35(103) | 32.56(28)  | せ | 須 | 14.29(9)   | 4.65(2)    | 3.28(2)    | お | お | 100.00(33) | 100.00(22) | 100.00(14) |
|   | ね | 100.00(33)  | 100.00(27) | 100.00(36) |   | せ | 61.29(19)  | 100.00(19) | 57.69(15)  |   | か | 7.79(12)   | 29.01(38)  | 52.32(79)  |
| ね | ね | 95.00(19)   | 100.00(21) | 100.00(16) | そ | 勢 | 38.71(12)  | 0.00(0)    | 42.31(11)  | か | 可 | 90.91(140) | 70.99(93)  | 43.71(66)  |
|   | 年 | 5.00(1)     | 0.00(0)    | 0.00(0)    |   | そ | 90.91(50)  | 100.00(63) | 96.15(50)  |   | 閑 | 1.30(2)    | 0.00(0)    | 3.97(6)    |
| の | の | 77.05(141)  | 95.36(144) | 54.59(119) | た | 楚 | 9.09(5)    | 0.00(0)    | 3.85(2)    | き | き | 98.84(85)  | 97.44(76)  | 100.00(74) |
|   | 能 | 22.95(42)   | 4.64(7)    | 45.41(99)  |   | た | 28.41(25)  | 1.37(1)    | 10.64(10)  |   | 起 | 1.16(1)    | 2.56(2)    | 0.00(0)    |
| は | は | 0.75(1)     | 4.55(6)    | 20.93(18)  | ち | 多 | 71.59(63)  | 69.86(51)  | 26.60(25)  | く | く | 87.88(58)  | 100.00(79) | 98.41(62)  |
|   | ハ | 50.38(67)   | 3.79(5)    | 12.79(11)  |   | 堂 | 0.00(0)    | 28.77(21)  | 62.77(59)  |   | 具 | 12.12(8)   | 0.00(0)    | 1.59(1)    |
| は | 者 | 47.37(63)   | 91.67(121) | 62.79(54)  | ち | ち | 94.87(37)  | 96.97(32)  | 100.00(36) | け | け | 1.96(1)    | 3.70(2)    | 24.39(10)  |
|   | 盤 | 0.00(0)     | 0.00(0)    | 1.16(1)    |   | 地 | 5.13(2)    | 3.03(1)    | 0.00(0)    |   | 介 | 70.59(36)  | 88.89(48)  | 2.44(1)    |
| は | 葉 | 1.50(2)     | 0.00(0)    | 2.33(2)    | つ | つ | 79.75(63)  | 59.26(32)  | 16.92(11)  | 遣 | 遣 | 27.45(14)  | 7.41(4)    | 39.02(16)  |
|   | ひ | 55.56(25)   | 61.70(29)  | 80.00(20)  |   | 徒 | 20.25(16)  | 40.74(22)  | 83.08(54)  |   | 気 | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 34.15(14)  |
| ひ | 飛 | 8.89(4)     | 31.91(15)  | 20.00(5)   | て | て | 100.00(69) | 97.10(67)  | 91.67(55)  | こ | こ | 98.28(57)  | 100.00(49) | 96.00(48)  |
|   | 日 | 35.56(16)   | 6.38(3)    | 0.00(0)    |   | 亭 | 0.00(0)    | 2.90(2)    | 8.33(5)    |   | 古 | 1.72(1)    | 0.00(0)    | 4.00(2)    |

|   |   | 為藤         | 定家         | 定為         |   |          | 為藤         | 定家         | 定為         |             |            | 為藤         | 定家         | 定為        |
|---|---|------------|------------|------------|---|----------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|-----------|
| 系 | 系 | 100.00(14) | 77.78(7)   | 100.00(10) | や | や        | 100.00(39) | 100.00(34) | 100.00(39) | ふ           | ふ          | 66.13(41)  | 41.03(16)  | 64.15(34) |
|   | 衛 | 0.00(0)    | 22.22(2)   | 0.00(0)    |   | ゆ        | 86.36(19)  | 100.00(25) | 100.00(31) |             | 婦          | 14.52(9)   | 0.00(0)    | 3.77(2)   |
| を | を | 100.00(56) | 100.00(64) | 84.75(50)  | よ | 遊        | 13.64(3)   | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 布           | 布          | 19.35(12)  | 58.97(23)  | 32.08(17) |
|   | 越 | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 15.25(9)   |   | よ        | 100.00(32) | 100.00(31) | 100.00(34) |             | へ          | 100.00(25) | 100.00(55) | 71.88(23) |
| ん | ん | 100.00(27) | 100.00(3)  | 100.00(1)  | ら | ら        | 98.85(86)  | 100.00(94) | 55.41(41)  | 辺           | 辺          | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 28.13(9)  |
|   |   |            |            |            |   | 羅        | 1.15(1)    | 0.00(0)    | 44.59(33)  |             | ほ          | 17.39(4)   | 54.55(12)  | 11.76(2)  |
| り | り |            |            |            | り | り        | 49.23(32)  | 94.92(56)  | 26.67(16)  | 本           | 本          | 82.61(19)  | 45.45(10)  | 88.24(15) |
|   |   |            |            |            |   | 里        | 50.77(33)  | 5.08(3)    | 73.33(44)  |             | ま          | 54.02(47)  | 10.42(5)   | 21.15(11) |
| る | る |            |            |            | る | る        | 97.80(89)  | 96.43(108) | 46.15(30)  | 満           | 満          | 45.98(40)  | 43.75(21)  | 23.08(12) |
|   |   |            |            |            |   | 流        | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 4.62(3)    |             | み          | 0.00(0)    | 45.83(22)  | 55.77(29) |
| れ | れ |            |            |            | れ | 累        | 2.20(2)    | 3.57(4)    | 49.23(32)  | み           | み          | 34.48(20)  | 93.88(46)  | 62.22(28) |
|   |   |            |            |            |   | れ        | 100.00(57) | 100.00(41) | 92.11(35)  |             | 見          | 18.97(11)  | 0.00(0)    | 11.11(5)  |
| ろ | ろ |            |            |            | ろ | 連        | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 7.89(3)    | み           | 三          | 46.55(27)  | 6.12(3)    | 24.44(11) |
|   |   |            |            |            |   | ろ        | 100.00(21) | 100.00(12) | 70.00(7)   |             | 身          | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 2.22(1)   |
| わ | わ |            |            |            | わ | 路        | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 30.00(3)   | む           | む          | 100.00(16) | 97.50(39)  | 95.92(47) |
|   |   |            |            |            |   | わ        | 41.67(5)   | 90.00(9)   | 78.95(15)  |             | 舞          | 0.00(0)    | 0.00(0)    | 4.08(2)   |
| ゐ | ゐ |            |            |            | ゐ | 王        | 58.33(7)   | 10.00(1)   | 21.05(4)   | 無           | 無          | 0.00(0)    | 2.50(1)    | 0.00(0)   |
|   |   |            |            |            |   | ゐ        | 66.67(2)   | 80.00(4)   | 66.67(4)   |             | め          | 36.36(8)   | 78.57(22)  | 36.67(11) |
|   |   |            |            |            | 井 | 33.33(1) | 20.00(1)   | 33.33(2)   | 免          | 63.64(14)   | 21.43(6)   | 63.33(19)  |            |           |
|   |   |            |            |            |   |          |            |            | も          | 100.00(112) | 100.00(86) | 100.00(67) |            |           |

表Ⅳ 「は」字の品詞別使用実態

| 定家 | 名詞 | 形容詞 | 副詞 | 動詞 | 助詞 |
|----|----|-----|----|----|----|
| は  | 3  | 0   | 0  | 0  | 4  |
| ハ  | 0  | 0   | 0  | 0  | 5  |
| 者  | 38 | 2   | 0  | 27 | 51 |
| 葉  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0  |
| 盤  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0  |

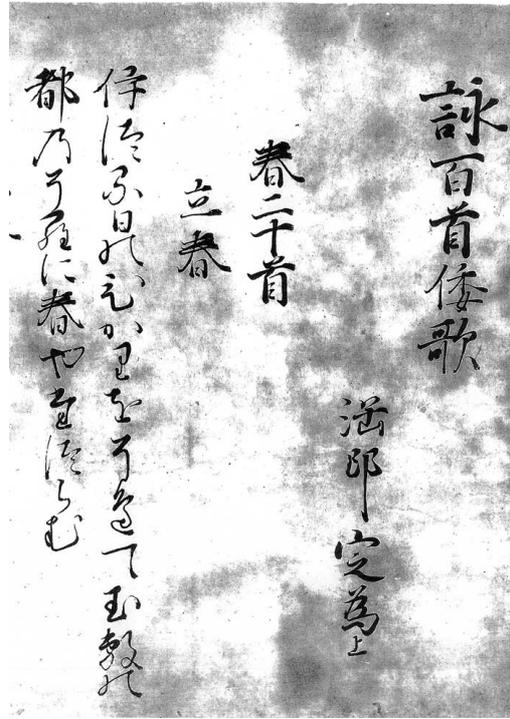
| 定家 | 助詞  |    |   |
|----|-----|----|---|
|    | 係・終 | 接  | 副 |
| は  | 4   | 0  | 0 |
| ハ  | 4   | 1  | 0 |
| 者  | 38  | 12 | 1 |
| 葉  | 0   | 0  | 0 |
| 盤  | 0   | 0  | 0 |

| 定為 | 名詞 | 形容詞 | 副詞 | 動詞 | 助詞 |
|----|----|-----|----|----|----|
| は  | 3  | 0   | 0  | 0  | 16 |
| ハ  | 3  | 0   | 0  | 2  | 6  |
| 者  | 20 | 0   | 0  | 17 | 16 |
| 葉  | 2  | 0   | 0  | 0  | 0  |
| 盤  | 0  | 0   | 0  | 0  | 1  |

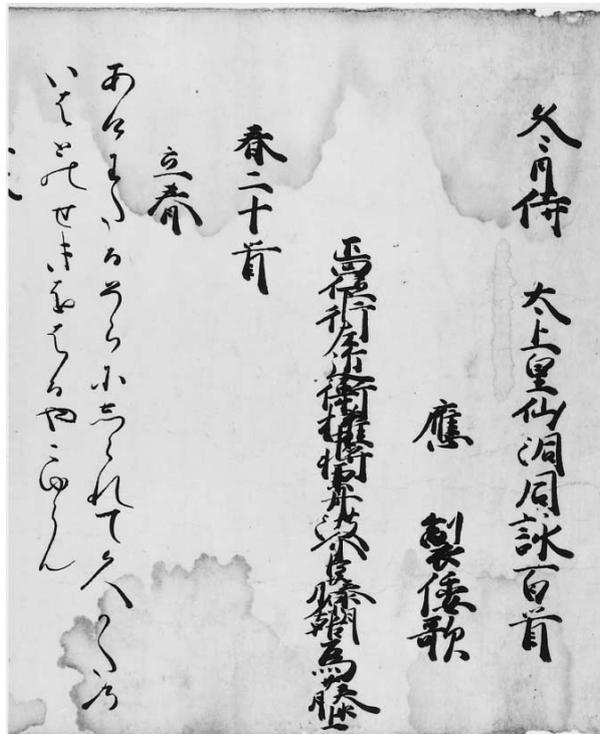
| 定為 | 助詞  |   |   |
|----|-----|---|---|
|    | 係・終 | 接 | 副 |
| は  | 13  | 3 | 0 |
| ハ  | 3   | 3 | 0 |
| 者  | 9   | 5 | 2 |
| 葉  | 0   | 0 | 0 |
| 盤  | 1   | 0 | 0 |

| 為藤 | 名詞 | 形容詞 | 副詞 | 動詞 | 助詞 |
|----|----|-----|----|----|----|
| は  | 0  | 0   | 0  | 1  | 0  |
| ハ  | 20 | 1   | 0  | 10 | 36 |
| 者  | 26 | 2   | 2  | 13 | 20 |
| 葉  | 2  | 0   | 0  | 0  | 0  |
| 盤  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0  |

| 為藤 | 助詞  |   |   |
|----|-----|---|---|
|    | 係・終 | 接 | 副 |
| は  | 0   | 0 | 0 |
| ハ  | 27  | 7 | 2 |
| 者  | 12  | 5 | 3 |
| 葉  | 0   | 0 | 0 |
| 盤  | 0   | 0 | 0 |



図Ⅰ 『嘉元百首』一条法印定為 (静嘉堂文庫蔵)



図Ⅱ 『嘉元百首』二条為藤 (冷泉家時雨亭文庫蔵)

初學百首 春和元年  
詠百首和歌 侍從  
春女首  
伴法成り乃た赤く心かきよよの海  
あみよそくふやたらいさしむ  
不ふつみへしほちかきよたらぬは  
こ山やまののせまらあらし  
うく心まらたしねをほしほろたけ

図Ⅲ 『拾遺愚草』藤原定家（冷泉家時雨亭文庫蔵）

図Ⅳ 異体仮名の使用実態

